

平成 17年度 大自然塾「鳩ノ巣フィールド」活動報告

鳩ノ巣連絡協議会

[はじめに]

大自然塾「鳩ノ巣フィールド」森林再生活動はこの3月をもって、3年半を経過した。昨年度に続き、平成17年度もNPO法人森づくりフォーラムの管轄のもと、関連団体2グループによる「鳩ノ巣連絡協議会」によって毎月1回の定例イベントの運営・管理を軸に展開してきた。活動内容は提出済みの「平成17年度活動計画」をベースに実施されたが、以下はその報告である。

[鳩ノ巣連絡協議会について - 活動の前提 -]

関連団体: 樹恩ネットワーク・森林インストラクター東京会の2団体による共同運営

運営方法: 月1回の定例会における協議決定により運営

活動内容: 月1回の「大自然塾」イベントの運営を柱とし、長期ビジョンのもとでの活動計画の実行

活動方針: 長期ビジョンを始めとする活動方針を以下とする。 * 2003.5.12 作成

長期ビジョン

委託された現在の鳩ノ巣・棚沢地区の森を「豊かな美しい森 = 多様性のある森」として創出し、奥多摩町の活性化に寄与することで、東京都「大自然塾」活動のモデル・フィールドとする。

フィールドのあるべき姿

“多様性”をキーワードとし、将来の森の“姿”として以下を目指すものとする。

生物の多様性

資源の多様性

森林形態の多様性

活動のあるべき姿

“多様性”をキーワードとし、市民ボランティアを含む多くの協力者とともに、以下を活動のあるべき“姿”として展開する。

活動メニューの多様性

森林施業の多様性

参加者の多様性

フィールドの現状認識と将来像

* 別紙資料 A「鳩ノ巣フィールド森林計画」参照。

活動計画: 上記の方針に従い、単年度活動計画を作成し、実行する。

* 別紙資料 B「平成17年度作業計画」参照。

[平成 17 年度活動報告]

1. 活動方針

「運営体制の強化と新たなフィールド展開のための基盤づくり」

総括:後述。

2. 活動内容

2-1 月1回の「多摩の森・大自然塾」イベントの運営を柱とし、長期ビジョンのもとでの活動計画を実行する。

[実績]

東京都環境局主催の定例イベントは「樹恩ネットワーク」「森林インストラクター東京会」が隔月毎に指導責任者を出すことで、4月～3月において13回の定例イベントを実施し、また東京都建設局主催のボランティア講座2回、日本サムスン(株)、立正高校など企業、学校の森林ボランティア活動をサポートするなど、26回に昇る活動を運営し、延べ1,000名を超える参加ボランティア(スタッフ含む)に対し、森林再生の意義と必要性を伝えるとともに年間計画のもとでの作業を指導した。特に参加者の「事故」もなく、当初の計画を達成することができた。なお、12月1日には小池百合子環境大臣が森林ボランティアの活動視察に訪れ、自らも間伐体験をされたが、数あるフィールドの中で、この鳩ノ巣が選ばれた意義は大きい。

* 別紙資料 C「17 年度鳩ノ巣フィールド活動実績」を参照。

2-2 月1回の「鳩ノ巣連絡協議会」を開催し、定例のイベント運営の内容及び中長期ビジョンとの整合を図る。

[実績]

毎月第一月曜日を定例日とし、4月～3月の12回を開催。森づくりフォーラム、樹恩ネットワーク、森林インストラクター東京会を主体に常時10名前後の参加者による協議により、毎回の定例イベントの運営体制、実施項目を調整・決定し、円滑なイベント運営に寄与した。また、掲げている中長期ビジョンを踏まえた活動は現状において継続軌道にある。

2-3 関連2団体からの新たなる人材登用を含め、他団体及び個人参加ボランティアとの交流を促進し、イベント運営体制の強化を図る。

[実績]

他団体及び個人活動者からの「班長及び班長補佐」の登用を積極的に行うとともに、2団体からは新たな人材を多数抜擢し、指導者層の充実と若返りを図った。現状のイベントスタッフは森づくりフォーラム3名、樹恩ネットワーク12名、森林インストラクター東京会19名、一般4名の計38名に昇る。

* 別紙資料 D「イベントスタッフ一覧表」を参照。

2-4 関連2団体は定例イベントとは別に、自主活動日を設け、目標とする作業計画の達成に努める。

[実績]

樹恩ネットワーク

回数:11回

動員数:延べ70名

主な作業:育成調査、残材整理、下草刈り、きのご駒打ち作業等
自主企画の森林ボランティア養成講座による実践作業体験は
3回実施し、延べ参加者数は78名。

森林インストラクター東京会

回数:7回

動員数:延べ66名

主な作業:植生調査、下刈り、道づくり、ボヤ刈り等

2-5 地元住民との各種活動を通じた交流を促進するとともに、地元における林業文化の継承や新たな林業事業化の方向を共に考える基盤を作る。月1回の「多摩の森・大自然塾」イベントの運営を柱とし、長期ビジョンのもとでの活動計画を実行する。

[実績]

月一回のイベントは地元にも確実に定着し、フィールドへの往復の際など親密な挨拶を交わすまでになり、フィールドの手入れにおいては一部地元住民との共同作業も通例になってきている。

柵沢地区:長寿会婦人部のみなさんとの交流

樹恩ネットワークの有志を中心メンバーとした地元の「長寿会婦人部」との交流会「森のクッキング」春編・夏編・秋編・冬編4回を実施。地元につながる料理方法の指導を受けた他、夏祭りの盆踊りへの参加、93歳の古老からの「聞き書き」も行った。

わさび田づくりへの参画

3年半に渡る実績の成果として、地元住民からの信頼に基づく活動が始まった。鳩ノ巣フィールドの近隣にある「わさび田休耕地」の提供で、指導を地元住民(小林公平さん)に仰ぎ、約30名の志願ボランティアが集い、18年3月にスタートした。

*別紙資料E「会員募集・柵沢ワサビづくり」を参照。

3. 鳩ノ巣連絡協議会としての重点実施項目

3-1 長期ビジョン実現に向けた運営体制の構築

樹恩ネットワーク、森林インストラクター東京会の2団体を核にした運営スタッフ及びリーダーを増強するとともに、他団体及び個人参加ボランティアにも呼びかけて協議会の運営体制を強化する。

具体的には

関連 2 団体会員のメンバー拡大

「鳩ノ巣つうしん」他を活用した呼びかけによるメンバー勧誘

[実績]

協議会メンバーとしては森林インストラクター東京会から 3 名、樹恩ネットワークから 2 名が新たに加わった。他団体については、それぞれに個別の活動をしており、交流は促進しているものの、鳩ノ巣連絡協議会への具体的な参画までには至っていない。

「鳩ノ巣連絡協議会」の PR とフィールド情報共有を目的とする「鳩ノ巣つうしん」は 3、4、5、6、7、9 号を発刊。* 別紙資料 F「鳩ノ巣つうしん」参照。

3-2 各フィールドの将来像に基づいた作業計画の立案と実施

	現 在	将来の姿	平成17年度計画
フィールド ^①	2000年に皆伐した跡地	落葉広葉樹林	下刈り 観察と記録
フィールド ^②	1999年に皆伐した跡地。 2000年3月に中間部にスギ・ヒノキを植樹	上部：落葉広葉樹 中間部：スギ・ヒノキの針葉樹 下部：花の咲く木を植樹	下刈り シカ害調査と対策 観察と記録
フィールド ^③	1994年に皆伐した後地	天然更新の2次林 林班区分して針葉・落葉のモザイク林を形成	道づくり 一部植樹と除伐 観察と記録
フィールド ^④	2002年に皆伐。 2003年3月に落葉広葉樹を植林	落葉樹林	下刈り 観察と記録 植樹
フィールド（1）	25年生のヒノキ林	美しく手入れのされたヒノキ林	保育作業 観察と記録
フィールド（2）	スギ・ヒノキ林	美しく手入れのされた針葉樹林	保育作業 観察と記録

* 詳細は別紙資料 B「平成 17 年度フィールド別作業計画」参照。

[実績]

フィールド^① の「シカ害調査と対策」を除いて、各フィールドともほぼ計画通りに実施した。これまで手が入らなかったフィールド^② への取り組みも「道づくり」をメインに本格的な作業がスタートした他、フィールド(1)、(2)の人工林の整備は順調に推移している。

4 回目となった3月の「植樹祭」ではフィールド^①、フィールド^② にイロハモミジ(80本)、イタヤカエデ(80本)、メグスリノキ(40本)、ミツバツツジ(30本)、ヤマザクラ(80本)、アカシデ(60本)、アサダ(30本)など、落葉広葉樹 12 種計 600 本の植樹を行った。

3 3 「フィールド」への取組み

* 取組みの基本の考え方は

別紙資料 G「フィールド 施業計画」を参照。

[実績]

鳩ノ巣フィールドではもっとも広い皆伐跡地であるが、前項でも触れた通り、ようやく施業に手がつき始めた。

実施内容は林班分け、植生調査、作業道整備、ボヤ刈りなど。

3-4 「作業部会」による活動

定例イベントでは危険を伴う作業、またさらなる森づくりのために不可欠な作業を推進するとともに、将来に向けた「人づくり・後継者づくり」のため、連絡協議会として実施する。

活動日：2005.4月～2006.3月 毎月1回+追加不特定日

作業内容： 風雪害木の処理

崩落個所の回収・防護

放置残材の整理

高所の枝打ち作業 他

[実績]

回数：15回

動員数：延べ60名

主な作業：倒木・風雪害木の処理、残材整理、掛け橋づくり、等

備考：作業補助器具類の実践作業体験を通じて、参加者の施業技術のスキルアップ及び安全対策に大きな成果があった。

* 別紙資料 H「作業部会/入山作業計画・実績表」参照。

3 5 作業道具の自前提供

国土緑推等の助成金獲得方法を研究し、作業道具の充実化を図る。

[実績]

樹恩ネットワーク、森林インストラクター東京会それぞれが申請した東京都「緑の募金」助成金は採択され、下記を購入、備品とした。

樹恩ネットワーク：

大鎌 10 枚、大鋸 5 枚、安全帯 5 枚、ロープ 10 本

森林インストラクター東京会：

2 丁差し(鉋+鋸)5 枚、下刈り鎌 10 枚、唐鍬 5 枚、砥石 5 枚、掛矢 5 枚、ヘルメット 10 枚、マニラ麻ロープ 5 本、救急セット 2 枚

定例イベント等の作業道具は森づくりフォーラムの用具・備品で対応しているが、2 団体の用具・備品でより有効な対応が可能になった。

なお、用具は奥多摩学生寮内に保管されている。

* 別紙資料 I「作業道具リスト一覧」参照。

3-6 フィールド境界の確定と図面化

16年度に引き続き、森づくりフォーラムに協力し、境界確定に努力する

[実績]

山主とのスケジュール調整ができず、未実施のまま、となっており、18年度への持ち越しとなった。

3-7 植生・資源調査の継続実施とデータ管理化

調査・データ管理の精度をあげるとともに、有用な蓄積を試みる。

[実績]

育成調査(2005/11/21 現在)

フィールド :コナラ 50本 36本

フィールド :エンジュ 22本 21本

ヒノキ全 115本 91本

スギ全 230本 133本

フィールド :ブナ 10本

フィールド :コナラ他広葉樹全 1495本 793本

フィールド(1):ヒノキ 721本(広葉樹除伐 60本)

フィールド(2):ヒノキ 1,575本(広葉樹除伐 10本)

* 別紙資料 J 「エリア別育成調査結果」を参照。

植生調査:

2005/5/18:フィールド 植生調査

* 別紙資料 K「フィールド 植生調査表」参照

2005/9/18:フィールド案内ルート植生調査(15本の目印樹)

* 別紙資料 J「植生樹種調査票」参照

水生昆虫調査:17年度実績なし

野生動物調査:17年度実績なし

シカ食害調査:特に「調査」活動はしなかったが、常時の見回りでのチェックでは植樹木の被害、特にイタヤカエデとエドヒガンが目立った。

ハチ類調査:ハチによる刺傷事故対策の一環として、また、動物調査の一環として、鳩ノ巣フィールドに生息するハチ類、特にスズメバチとアシナガバチの生息状況を把握するため、6月～11月にかけて、トラップによる個体数調査を実施した。固体種14種が確認され、キイロスズメバチがもっとも多く(約50%)、月別個体数では9月に約半数が確認された。

* 調査結果は別紙資料 M「ハチ調査」参照。

* なお、別途平成 17 年度「奥多摩鳩ノ巣フィールドハチ類調査」報告を 15 頁の報告書としてまとめた。

[課題]

フィールド全体の資源調査は上記の通り、[育成調査] [植生調査] [水生生物調査] [野生動物(鳥類・昆虫含む)調査] [食害調査]の多岐に渡り、時間・労力とも負担が大きい。また、シカ食害調査では調査ノウハウも不足しており、その精度は疑わしいところもある。

可能な範囲での継続実施の方向としたい。

3-8 新たな林地(放置林)の獲得

地元の協力を得て、枝打ち・間伐等の作業可能な林地の獲得に努める。

[実績] 地元自治会長等に打診したものの、実績なし。

前述地元からの「わさび田休耕田」の提供は実現した。

4. イベントを通じた重点実施項目

4-1 参加ボランティアの固定&継続化及び拡大化

具体的には

常なる参加呼びかけ

「鳩ノ巣つうしん」の活用

[実績]

については毎回のイベント時に常に心がけ、は前述の通りである。結果としての拡大化は順調で、企業がらみの参加者増を含め、30人の定員枠は常にオーバーの状態になっている。固定&継続メンバーも漸増している。

4-2 地元住民との共同作業活動の推進

スタッフ・参加ボランティアと地元住民との共同作業により、イベントを盛り上げる。

[実績]

前述したが、「森のクッキング」など年4回、熊野神社お祭り参加、薬師堂お祭り参加、ホタル鑑賞会等により、交流を活発化させるとともに、棚沢地区の自治会長他、地元キーマンとの人間関係も順調に深まっている。

4-3 他団体会員及び個人活動者を含むリーダー・スタッフ体制の構築

具体的には イベント終了後の懇談会の開催(1,2回の試み)

「鳩ノ巣クラブ」の展開に努める

[実績]

7月、12月のイベント終了時に「交流会」を初めて実現。イベント参加者がほとんど参加し、地元住民の参加・差し入れもあって、スタッフと参加者、参加者同士、また地元住民との懇談ができ、リピーター対策としては有意義だった。現実的なスタッフ体制の補強には至っていないが、今後も継続実施していきたい。

鳩ノ巣フィールドの森づくり活動において、その主旨を理解し、継続的な参加をされている管理団体以外の参加者を柔らかい組織で取り込むグループ(仮称「鳩ノ巣クラブ」)結成は自主的な現場活動の組織体として将来的には実現させる必要はあるものの、実現は難しい。ただ、前述の「わさび田づくり」においては「会員組織(会費徴収)」としての募集において、30名が応募してきたこともあり、可能性としては十分考慮できる。

4-4 フィールド案内ノウハウの蓄積と共有化

「東京の森の再生」を目標とする「大自然塾」活動の意義を含め、「中長期ビジョン」を前提とした「フィールド案内ノウハウ」をリーダー・スタッフ間で共有し、新案内人登用も意図しつつ、参加ボランティア及び地元住民に提供し続ける。

[実績]

定例イベントでは毎回実施し、案内者も固定的だったメンバーから拡大した。「ノウハウの蓄積と共有」についてはスタッフに対し、「鳩ノ巣フィールド・活動マニュアル」(別紙資料L)を作成、配布した。

4 5 シカ食害対策の効果把握追跡調査の実施

16年度に実施したシカ食害対策(ネット張り、棒ネット、ホダ木囲み、竹柵囲み)の効果把握の調査計画を立案・実施する。

[実績]

棒ネット、ホダ木囲み、竹柵囲みの補修等は行ったが、各対策の効果把握までには至らなかった。時間・労力投入の限界及び調査ノウハウ不足のため。

4-6 蜂対策を含めた安全管理体制の強化

[実績]

蜂シーズンのイベント時には常に注意を促し、非常時に備えて「蜂ノック」等を携帯するなどの対策を実施し、また作業時の事故防止意識を徹底した結果、特に報告すべき事故はなかった。3年半に渡る活動を通して“無事故”を継続している。

5. フィールド別作業活動計画とスケジュール案

フィールド毎の月別作業計画のもとで、イベント展開を図る。

* 詳細は別紙資料B「平成17年度フィールド別作業計画」を参照

[実績]

昨年度に続き、「作業目標の共有化」については「初参加者に対する“フィールド案内”」の中で、各フィールドの特徴を説明するとともに“その日の作業の意味”を解説し、ボランティア作業が単なる労働提供に終わることなく、全体目標の一環であることを理解できるよう、努めた。

「作業内容の魅力化」については、いわゆる“作業”ではない「育成・植生調査」を交えたりして、変化を持たせたりした。

6. 自主活動計画

各関連団体は定例イベントの他に、自主的な作業活動を実施する。

[実績]

前述 2-4、3-4 に同じ。

[17年度活動の総括]

多摩の森・大自然塾「鳩ノ巣フィールド」の17年度は13回の定例イベントの他、13回に昇る学校、企業からの依頼による森林ボランティア体験活動があり、延べ1,000名を超える参加者を数えた。さらに、鳩ノ巣連絡協議会2団体の自主活動は新たに発足した「作業部会」の活動を含め、30数回の入山を果たし、中長期を見据えた森林整備計画は順調に推移した。

フィールド全体の“再生”状況は計画通りの進捗で、放置されていたヒノキ人工林の手入れも、当初予定の皆伐地における植樹もほぼ終了し、懸案であったフィールドの整備作業も動き出した。地域住民との交流もさらに促進し、小池百合子環境大臣の来訪もこうした状況が背景にあったと云えるが、この観点から見れば、長期ビジョン[委託された現在の鳩ノ巣・棚沢地区の森を「豊かな美しい森＝多様性のある森」として創出し、奥多摩町の活性化に寄与することで、東京都「大自然塾」活動のモデル・フィールドとする]に向けては、極めて順調な軌道にあると自己評価できる。

活動方針とした「運営体制の強化と新たなフィールド展開のための基盤づくり」における前者の「運営体制の強化」は、指導者層の若返りを含むスタッフ体制の充実に応分の成果をみたが、現フィールドの拡大を狙いとした後者の「新たなフィールド展開」は十分な地元への働きかけができず、不調に終わった。ただ、フィールドの近隣で地元の提供による「わさび田づくり」が参加ボランティアを中心にしてスタートするという新たな展開もあり、極めて充実した、得るところが大きい年度であったと総括する。

なお、18年度については「大自然塾」事業の主催者である東京都が2年後の平成20年3月をもって、この事業の撤退を表明していることから、これを念頭に置いた運営方法模索の準備の年度となる。

[その他]

1. 森づくりフォーラムとの協同強化

運営方法について

[実績]

鳩ノ巣連絡協議会事務局機能の強化。スタッフ増による協議会開催案内や議事録作成・送付など。

他団体及び東京都(環境局)とのコミュニケーション強化の推進

[実績]

特になし。

2. 東京都環境局への要望

「大自然塾」事業は2年後の平成20年3月をもって終了とのことではあるが、森づくりには長期の視点が必要であり、芽生え始めたばかりの森林ボランティア活動の継続及び森林整備に対する市民意識のさらなる醸成のため、この事業継続の働きかけをお願いしたい。

東京都・多摩の森の森林整備の必要性を訴える広報活動の強化を期待したい。

以上 平成18年5月12日

作成: 鳩ノ巣連絡協議会座長 岡田誓 (森林インストラクター東京会)